

0.

物資の運搬任務で、私はアカシア隊長とともにリリイウッドを訪れていた。

無事に馬車の積み荷を商人へと受け渡し、復路のために馬車のメンテナンスをしている時のこと、

「ちょっといいかしら」

後ろから、アカシア隊長の声がした。

「はい、なんでしょう」

呼ばれて振り向くと、馬車の荷台に腰を掛けたアカシア隊長がちょいちょい、と手招きをしている。

何だろう。

あわてて隊長のもとへと駆け寄ると、

「今日の輸送任務、お疲れ様。途中からはチェリーセーじに任せっぱなしだったけど、そろそろ隊長の座も交代かしら」

真っ赤に染まった夕日を背にして、アカシア隊長はくすくすと笑った。

そんな仕草に思わず見入ってしまう。

ほんの何気ない仕草。けれど、アカシア隊長のそれは

特別に綺麗で、妙に色っぽい。男の人も、女の人も、誰もが思わず振り返ってしまうような魅力が、アカシア隊長にはある。

「いえ、そんなことはありませんよ。私なんてまだまだ未熟で」

「ふふつ、そうかしら。隊のみんな、特にハリエンジュなんてね、ここ最近のあなたの成長っぷりを凄く評価しているのよ」

スプリングガーデンで唯一無二の、物資の輸送を専門とする部隊。

それが私の所属するアカシア隊だ。

「そ、それは、恐縮ですけど……。どうしよう、帰ったらハリエンジュ副隊長と顔を合わせられないですー」

アカシア隊長、ハリエンジュ副隊長、ダリアさん、ルピナスさん、それに私。

隊員たった5人の小さな部隊だけど、少数精鋭——私が精鋭なのかは置いておくとして——の凄い部隊。普段はツーマンセル、スリーマンセルで行動することが多く、全員がその場に揃う機会は少ないけれど、強い絆で結ばれた、私にとっては第二の家族とも言える大切な居場所

だ。

「それで、なんだけど」

アカシア隊長が続ける。

少しかだけ声のトーンが低くなったので、少しかだけ身構えた。

普段はおっとりマイペースな口調でしゃべるアカシア隊長が、任務の話をする時の声色だったからだ。

「ちよっと、お使いを頼まれてくれないかしら」

「……お使い、ですか？」

「そう、バナナオーシャンにいる、ある人にこれを届けてほしいの」

そう言うと、アカシア隊長は一封の封書を取り出した。

「……封書、ですな」

「そう。ある人に、今度届けるって約束したものなんだけど」

受け取ってみると、封書はとても薄く、風に吹かれてぺらぺらと揺れていた。

「本当は私が届けるべきだと思う、できることならそうしたい。でも、どうしても明日までにブロッサムヒルへ戻らなければいけないのよね」

アカシア隊長は心底残念そうに、申し訳なさそうに言うった。

バナナオーシャンはリリィウッドの南に位置する常夏の国家で、リリィウッドとは『富と誇りの遊歩道』によって最短距離で結ばれている。

その『遊歩道』は要所要所に害虫の出現に備えた詰め所が置かれており、比較的安全に、しかも最速で国家間を行き来できるようになっているのだけど。リリィウッドから見てバナナオーシャンは真南にある国家。対するブロッサムヒルはリリィウッドの北東に位置しており、リリィウッドからバナナオーシャンへ向かうということは、ブロッサムヒルから遠ざかることになってしまう。そのため、明日中に帰国するとなると、アカシア隊長が自らの手でこの封書届けるのには無理がある。

「それで、私に届けてほしい、と……」

確かに、この状況では私が引き受けるしかない。私が引き受けなければ、この荷物を待っている人のことを悲しませることになってしまう。

けれど、

「私で、私なんかで大丈夫でしょうか」